バカとメダル（欲望）とグリード

ヒョウガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとメダル（欲望）とグリード

【Ｎコード】
Ｎ０６９１Ｔ

【作者名】
ヒョウガ

【あらすじ】
明久が幼いころ拾ったメダルが明久の中に入りこんだ。
高校二年の春明久の中に眠るメダルはグリードは目覚めた。
またその頃坂本雄二にも不思議な現象が起きた。
仮面ライダーオーズとバカと召喚獣と仮面ライダー電王の二次創作です。

プロローグ（前書き）

甥にせがまれて作ってみました。

プロローグ

プロローグ

鴻上ファウンデーションが経営する美術館にて

「そんじゃ、早速お宝を頂くとするか。」

「おい、あんまデカい声出すなよ。誰かに気付かれたらどうすんだよ」

「バカ、誰も来ねえよ。今朝からの臨時のバイトも今頃は薬でぐっすりだ」

美術館内では2人の警備員が言い争いをしていた。

実はこの2人はドロボウで、警備員をしていたのは警備システムの確認や、館長の信頼を得て行動をしやすくする為だったのだ。

「これで半年間、ここで働き続けた苦労が報われるんだな。」

「ああ、さっさと」

ガチャッ

「すんませ～ん」

「「うひゃあっ！！」」

２人が話していたところで突然扉が開き、中から眠そうな顔をした青年が顔を出した。

「ちょっと待て！ひそひそひそひそひそひそひそ（おい、どうなってんだよ！薬で眠ってたんじゃなかったのかよ！）」

「ひそひそひそひそひそひそ（こっちが聞きてえよ！象だって３０分は眠る強力な奴を入れたジュースを差し入れたんだ！）」

２人は寝ているはずのバイトが起きているためかなり動揺していた。

「あー、すんません、さっきのジュースですけど、ちょっと転んで溢しちまって。」

（畜生！飲んだのを確認すりゃよかった！）

（どうする？）

（仕方ねえ、今日は諦めるか。）「おい、お前」

２人はやむなく盗みを断念し、バイトに声をかけた。

「……」

しかし、バイトは黙ったままだった。

「…おい、返事しろよ」

反応がなかったのでもう一回声をかけた。

「……」

「…おい！」

またしても反応が無いため思わず大声を出してしまう。

「……ぐう」

「……はっ？」

「……おい。こいつ、立ったまま寝てるぞ！」

ずこおっ！

ドロボウはおもいっきりずっこけた。

「まあ、結果オーライだろ。あれだけデカい声で起きなかったんだからちょっとやそっとじゃわかんねえって」

「そんじゃあ、やるか」

バイトを事務室に放り込むと、ドロボウ2人は行動を再開した。

「これもいいな…おっ、こいつも高そうだ」

「おい、そろそろアイツ起きるんじゃないか？そろそろ止めようぜ」

ドロボウ2名は物色を開始していたが片方はバイトが目を覚まさないか心配していた。

「平気平気。ドアに仕掛けをして出てこれねえようにしてるからよ。んな事よりも手伝えよ」

しかし2人は気付いていなかった。

2人のすぐ後ろにある石棺から大量の“メダル”がこぼれ、赤外線のセンサーに触れたことに…

ブーッ　ブーッ　ブーッ　ブーッ

バタバタバタバタバタバタバタバタッ

鴻上ファウンデーション本社の地下駐車場に銃やバズーカで武装した兵士達が次々と集まっていた。

先に駐車場に来ていた隊長格の男が兵士一人一人に手に持っていた“メダル”を一枚ずつ投げると兵士達は走りながらそれをキャッチし、駐車場に大量に並んでいた“自動販売機”の前に一人ずつ並んだ。

チャリンッ　ピッ　ガコォン！

兵士達は一斉にメダルを自販機に入れ、真ん中にある大きなボタンを押した。すると自販機は黒と黄色のカラーリングでドームのような特徴的なデザインのバイクに変形した。兵士達はそれに一人ずつ乗り、美術館へと向かって行った。

「よし、そろそろずらかるとするか」

「やっと終わったか…誰かこない内にさっさと…」

２人は気付いていなかったがその時石棺からこぼれたメダルが光り出し人の手のように集まり石棺の中心にある取っ手を回した。

ブオオオオオオオオオオン

「ん？うっうわっ！？なんだ！？」

「眩しくて何も見えない！」

ジャラ

石棺は鈍い光を放つと大量のメダルに姿を変えた。

そしてそのメダルは５つの人の形に集まった。

「なっなんだよ一体！？」

「たっ助けてくれぇっ！」

ドロボウ２人は目の前の出来事に腰を抜かし、助けを求める。

ズガァンッ！

そこに壁を突き破って一台のバイクが突っ込んできた。

バシュッ！　バシュッ！

ガキィン！　ガキィン！

バイクに乗っていた男はメダルに向けてショットガンを撃つが弾を弾かれただけで効果は無かった。

「こちらライドベンター第一小隊後藤。メダルの覚醒が始まりました。指示を」

男は手元にあった通信機器でどこかに連絡を取った。

鴻上ファウンデーション本社　会長室

鴻上ファウンデーション会長の鴻上光生（こうがみこうせい）は生クリームを掻き混ぜながら通信機器に向かって言った。

「殲…滅」

鴻上は指示を出した後にレコードをプレイヤーにセットして音楽をかけ、それに合わせて歌いながらテーブルの上に置いておいたケーキのデコレーションを始めた。

「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ～♪Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ～♪Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ～♪Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ～♪Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　Ｄｅａｒ…」

そこまで歌うと鴻上はゆっくりとチョコレートでケーキに文字を書いた。

G　r　e　e　d

「…グリー…ド。」

鴻上は呟くように今日誕生した…いや、復活した者達の名前を言った。

「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕーーーーーーーーッ！」

鴻上が歌い終わるとライドベンター隊の壊滅を知らせるアラートが鳴り響いた…

そのころ美術館の事務室にて

？？？「さて彼女に目覚めてもらわないとね」

いつの間にか眠っていた男はこの騒動の中で一人の少女を抱え逃げていた。

この男は何者なのだろう？
そしてあの少女は何者なんでしょうか？
今はまだ解らない。

公園

???1「クソッ！！」
???2「維持が出来ないなんて」
???3「これも封印の影響かしら」
???4「このままじゃ消える」
???5「どうするつもりだ」
???1「何とか俺達の秘宝と紫のメダルを10枚は死守したんだ」
???2「でも僕達の悪運もここまでだね」
???3「肝心のセルメダルが足りないのよ」
???4「俺達消える？」
???5「畜生！！」
そうして彼ら？は消えた。

否メダルだけを残して消えたのだ。

そして、日が昇り一人の少年が公園を通っていた時

砂場の上に縁が金色で、鳥の絵が描かれた赤いメダルが目に入った。

???「何だろう?」

そして、少年がメダルに触れたとき不思議な現象が起きた。

そこら中に散らばっていた赤のメダル９枚、青のメダル９枚、緑のメダル９枚、黄色のメダル９枚、白のメダル９枚、

そして、紫のメダル１０枚がその少年の体の中に入っていたのである。

???「????」

少年には何が起きたのかわからなかった。ただ一つわかったのは急に意識が失ったことだけである。

あれから１０年

少年は走っていた。

???「どうして起こしてくれなかったの?」

???１「起こしたのに起きなかったのはどこのどいつだ!」

???２「こればっかは僕達のせいじゃないよ」

???3「そうよ。坊やの自業自得よ」

もう一度言おう。少年は一人で走っている。

にもかかわらず少年は誰かと話をしている。

傍から見ていたら独り言を話しているにしか見えない。

校門前

???「遅いですよアキ兄」

???「ゴメンゴメン。支度に手間取ってね」

???「全くだ。遅刻だぞ吉井兄」

さっき声を掛けた男の姿は浅黒い肌に、スーツ姿だが、その内に詰め込まれた、針金の束ねたかような筋肉質の肉体は隠しきれない。

明久「あ、鉄じ――じゃなくて西村先生。おはようございます」

「吉井兄。今、鉄人と言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

うまくごまかせたようだ。

今、僕達の目の前にいる人は文月学園が誇る、鋼鉄の生活指導担当教師、西村教諭である。

それに西村先生の言う通り、私達は遅刻をしていた。

「それにしても、こんな時間に来ておいて普通に『おはようございます』じゃないだろ」

「え？え～っと……今日も肌が黒いですね？」

「……お前は遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

「そっちでしたか。すいません」

「まったく。まあいい」

そして鉄人は箱から封筒を一通取り出す。

封筒を渡していた鉄人は遠い目をしながら僕に話しかけた。

「吉井兄……今だから言うが、俺は今まで、吉井兄はもしかしたらバカなんじゃあないかと疑っていたんだ……」

「あははは。それは大きな間違いですね」

僕は受け取った封筒をきれいに開けようとして悪戦苦闘しながら答えていた。

「まったくだ。こんな勘違いを起こすなぞ、俺の目は節穴だったとしか思えん」

そう言って、西村先生は深くため息をついた。

「そうですよ。そのうち、あだ名にふし穴が追加されちゃいますよ？」

結局、きれいに開けることを断念した僕は、端をビリビリと破り出す。

「……吉井兄、お前への疑いは無くなった」

そして、中から折り畳まれた紙を取り出すとそれを開いて中を確認する。

私達はそれをそぉっと後ろから覗いた。

『吉井明久……Fクラス』

「お前は正真正銘のバカだ」

プロローグ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

設定（前書き）

設定集です。

設定

設定

名前：吉井明久（よしい あきひさ）

性別：男

容姿：原作と同じ。

性格・特徴：原作と同じ。

得意科目：世界史、日本史

苦手科目：その他全て

召喚獣：原作と同じ。但し、何らかの条件で変化する。

備考：幼いころにグリードいやメダルと出会いなぜかメダルが明久の中に入っていく。

それ以来グリード達は明久とコンタクトをとり行動を共にする。

ちなみに明久から出ると動けなくなりメダルが壊れそうになる。

オリキャラ1

名前：響奏（ひびきかなで）

性別：女

容姿：ブリーチの織姫。

性格：大人しく優しい

得意科目：英語

苦手科目：理系

召喚獣：Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔに出てくるセイバーの姿。

備考：もともと別世界の住人だったかがグリードによって世界を壊されバカテスの世界にやってきた。

それいえ彼女はグリードを嫌い。明久の中にいると知ったら何としてでも取り出そうと行動を取る。

名前：吉井風香（よしいふうか）

性別：女

容姿：明久の女装した姿アキちゃんの髪がロングになった状態。

性格：大人しく優しい

得意科目：古典、日本史、世界史

苦手科目：なし

召喚獣：Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔに出てくるライダーの姿。
備考：明久の双子の妹。
明久に古代の生物が取りついたのを知り何とかしようとした結果古典と日本史と世界史が得意になった。
またグリード達とは仲が悪い。

《独自の設定》

鴻上ファウンデーションは文月学園のスポンサーのひとつ。
そのため学園敷地内にもいくつかライドベンターが設置されている。
グリード同士もしくはオーズとの戦いメダルが奪われるとメダルは即座に破壊される。

設定（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしおります。

第一話

???

???視点

???「準備好調か？」

???1「ああ。順調だ。グリードは人の欲望をすって成長をしている」

ここはどこかわからない場所。

だが何者かが動き始めている。

???「ではそろそろ活動を開始するな」

???1「はい。楽しみです」

???視点終了

明久視点

「何だよFクラスって。最下位クラスじゃないか」

先程鉄人から結果を言われがっかりとした言い方で呟く僕。

「振り分け試験は自信があったけどなぁ…」

風香「アキ兄が真面目に勉強すればＤクラスには入れたかもしれないけどね」

メズール「坊や。こう言っては何だけど１００点のテストで１０点なら間違いなくＦクラス決定よ」

ガメル「メズールの言うとおり」

「ひどいよ風香にガメルにメズール！君らだけは僕の味方だと思っていたのに！！」

「「「一分も勉強せずゲームやってた坊や（アキ兄／アキヒサ）に何を言えと？」」」

メズール達に耳に痛いこと聞きながら廊下を歩いているととある教室に目を窺った。

「…なっ何だこのばかでかい教室は…」

そしてその教室の大きさに僕は思わず戦く。教室からは教師らしき人の話声が聞こえてくる。

高橋先生「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年Ａ組の担任高橋洋子です。
　宜しくお願いします」

そう、この教室は上位クラスであるＡクラスの教室だ。

そしてこのＡクラスの担任は、学年主任の高橋洋子主任である。

「何てデカさのプラズマディスプレイなんだ、贅沢な！！」

僕がプラズマディスプレイに驚く。しかし驚くのはそれだけではなかった。

「さらにはシステムデスクにリクライニングシート、ノートパソコン支給か。

…あっ！フリードリンクコーナーも！お菓子も食べ放題だ、いいなぁ、食べたいなっ！！」

ガメル「俺も食いたい」

メズール「もうガメルたら」

カザリ「突っ込むポイントはそこなの！？」

アンク「欲しいのなら奪い取ればいい。明久！欲望を高めろ！そしてセルメダルを生産するんだ」

ウヴァ「こんなものが欲望とは８１０年も経つと人間は変わるものだ」

風香「あんた達勝手にアキ兄を乗っ取らないで！！」

そうアンク達は実体化が出来ないため明久を媒介にして表に出る。

教室の外で騒いでるのに関わらずそんな事は気にせず高橋主任の話は続いてる。

「以上で基本的な設備の確認は終わりですが、その他の施設に不

備のある人はいますか？
教材資料は元より冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給します。他に必要なものがあれば
遠慮などせずに何でも申し出て下さい」
「く、何て贅沢なクラスだ。ほかの所なんて滅多にないのに…」
僕がさらに羨ましがる。
カザリ「さっきアンクが言ってるようにその欲望をセルメダルに変えてよ」
ウヴァ「そうすれば俺達が叶えてやる」
アンク「そうだ。俺達にとって体であり同じグリードとしてな」
ガメル「メダル♪メダル♪」
メズール「坊や欲望を開放しなさい」
風香「いい加減にしろ！！」
「では、始めにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん、前に来て下さい」
「……はい」
高橋主任が促すとその女子生徒は前に出る。
「……霧島翔子です。宜しくお願いします」

彼女の名は霧島翔子。文月学園で学年主席の座を持っている実力のある女の子だ。

「あれが有名な霧島さんか…。
美人なのに誰とも付き合わないせいで女の子が好きだって噂だけど…」

僕は霧島を見て落ち着いた常態になる。

5人？のグリード「「「「「ちっ」」」」」

風香「ほっ」

「Aクラスの皆さん、これから一年間霧島さんを代表に協力し合い研鑽を積んで下さい」

高橋主任の話が続いてる時、僕はある事を思い出した。

「そうだ！自分のクラスに行かないと！！」

風香「待ってくださいアキ兄！」

僕は大慌てで自分の教室へと向かう。

「これから始まる『戦争』でどこにも負けないように…」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーFクラス前ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「……（ドサっ（バッグを落とす音））」

僕は突然唖然する。

（周りはまだ気にしない。でも初日から遅刻してしまった……。
なにしろFクラスだ。
　変な奴らがいたらどうしよう……）

そして不安な表情まで出てくる。

「いやいやこれから一年一緒に過ごす仲間なんだし、多分心配してくれてるよな僕の事。
　よし、大丈夫！明るく入ろう」

だが僕はその程度で落ち込む男ではない。

「す「「すいません、ちょっと遅れちゃいました」」

僕が賑やかな表情で教室へと入ろうとする前に風香と一人の女の子が先に入って行った。

「早く座れ、このウジ虫…や…」

「……うわぁぁぁん、私、ウジ虫じゃありませ〜ん（涙目）」

???「女の子に向かってウジ虫は無いんじゃない」

「風香と奏！　すまん、明久かと思ったんだ！　だから、風香泣くなって！」

『『『『坂本、風香様をよくも、泣かしたなぁ！！！！』』』』

「お前ら、違うんだ。　特に須川。　スタンガンなんて危ない物をギャァぁああ！！」

すごいな。　一秒ぐらいで雄二が地に伏したよ。

表現は難いけど、阿鼻叫喚？の光景が広がっていた。

後に入ってきた僕はその状況を見て、なぜこうなったかが納得が出来た。

「……風香」

「はい？」

「冗談、きついよ（苦笑）」

「ふふ、何のことでしょう？」

それから復活した雄二に僕は話しかけた。

「…で雄二、何やってんの？」

「ああ。先生が遅れるらしいから代わりに教壇に上がってみた」
僕の質問に答えたのは、僕の悪友の坂本雄二である。
「先生の代わりって雄二が？何で？」
「一応このクラスの最高成績者だからな」
「え？それじゃあ…」
「あぁ、俺がＦクラス代表だ」
雄二が教壇に上がっている理由はこのクラスの代表だからである。
「これでこのクラス全員が俺の兵隊だな！」
（つまり雄二を説得すればクラスを動かせるってワケだ）
２人が会話している最中に担任の先生が来た。
「えーっとちょっと通してもらえますかね？それと席についてもらえますか？ＨＲを始めますので」
「席ですか」
僕が後ろを振り向くと、
「畳、座布団、卓袱台、これがＦクラスの教室！？」

「今気付いたのかよ…」

風香&奏「真っ先に気付こうよ！！」

僕はこの教室の設備に驚いた。

「くそ、格差社会と言う奴か…！」

「吉井君、早く席について下さい」

「…はい。僕の席は何処ですか？」

「好きな所にどうぞ」

「席も決まってないの！？」

「それがFクラスです」

僕達は適当な席へと座る。

「えーおはようございます。二年F組担任の…。……、
…福原慎です。よろしくお願いします」

（チョークすら用意されてないの）

「まずは設備の確認をします。卓袱台、座布団、えー…不備があれば申し出て下さい。
必要なものがあれば極力自分で調達するようにして下さい」

福原教諭が簡単に説明する。

（何このＡクラスとの雲泥の差…）

「？先生、僕の座布団殆ど綿がはっていないですけど」

「我慢して下さい」

僕がそう尋ねると福原教諭は即答する。

ヒュュュ…（隙間風の音）

「先生、隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。でも今は我慢して下さい」

バキッ！！（卓袱台の脚が折れた音）

「先生、卓袱台の脚が折れたんですけど」

「木工用ボンドが支給されますので自分で直して下さい」

福原教諭の最後の言葉で、（ここって本当に教室？）と僕は頭の中で絶望する。

「それにしても、本当に酷い教室だよな。ここで一年過ごすのか。不潔だな」

僕は、先生から受け取った木工用ボンドを受け取りそれを使って卓袱台の脚を直しながらそう呟く。

「文句があるなら振り分け試験で良い点を取っとけよ」

雄二が返答する。無論、それも無理はない。

「まあそうだよね、雄二の言う通だよ」

僕は頷きながら卓袱台の脚を修復し終わる。

「では自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします」

福原教諭が自己紹介を進行させる。そして廊下側から順番に始まる。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年一年宜しく頼むぞい」

1人目が終わると僕は、いつ見ても男とは思えないんだよね。

「……土屋康太」

「相変わらず口数が少ないなぁ」

僕は二人目の生徒の紹介の後でそのような言葉を呟いた。

(学力最低クラスともなると一部の例外を除いて女子はいないのかな)

僕がそうやって思っていると、

「ーーーーーーです。ドイツ育ちで日本語は読み書きが苦手です」

「おぉ、女子の声だ！」

僕のテンションが上がる。

「趣味は探し中です☆」

「はろはろー」

「あ、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

手を振って挨拶する島田さんに僕は普通に挨拶をする。

「あれ？風香もFクラスなの？」

「ええ、試験当日熱が出てしまって」

「アンタならAクラス確実でしょうに。ほんと残念だったわね」

「そうですね～」

なんだろう？和やかな空気のはずなのに空気が重いのは何でだろう。

「おい明久、そろそろお前の出番だぞ」

（はっもう僕の番か）

雄二が僕を促す。

（こういうのは出だしが肝心…。気さくで明るいこ好青年な所をアピールしよう！）

「えーっと吉井明久です。気軽に『ダーリン』と呼んで下さいね♪」

『『『『ダァアーリィーン！！』』』』

僕がそう言うとほかの男子生徒達は一斉に叫んだ。

（ふ…不愉快すぎる…）

「…とにかくあれは忘れて下さい、これから一年宜しくお願いします…」

メズール「（自分でダメージ受けてちゃ世話ないわね）」

風香「アキ兄あれはいくら何でもおかしいよ」

「僕は好青年をアピールしたつもりなんだけどこうなるとは思わなくて」

カザリ「（あれで好青年？）」

ウヴァ「（失敗しまくりだな）」

僕の自己紹介が終わり。再び当たり障りのない自己紹介が続き、次は風香の番が回ってきた。

風香がゆっくり席を立ちあがると、数人の男子生徒が驚きの表情を浮かべていた。

「吉井風香です。　特技は料理で、趣味は読書、アキ兄を傷つけた者への報復です。　よろしくお願いします」

「響奏です！1年間よろしくお願いします！」

Fクラス男子「はい！　二人に質問です！」

二人「「はい、何でしょうか？」」

「何で「あの…（はぁ、はぁ）遅れてすいま…せん（はぁ、はぁ）」ここにいるんですか？」

二人に質問をしようとしたときにとある生徒がFクラスへと入ってきた。

第一話　（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第二話

「あの…遅れてすいま…せん」

一瞬、クラス全員の視線は彼女に移した。

「丁度自己紹介している所なのであなたお願いします」

福原教諭が自己紹介をさせようと促す。

「はッ、はい！」

少女はやや緊張気味な返事をする。

「あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします…」

今にも微妙に焦っている少女の名は姫路瑞希。

「はいっ！質問です！」

周りの男子生徒の1人が質問する。

「あっはっはい、なんですか！？」

姫路さんも反応に追いつかずびっくりする。

「えーと、なんでここにいますか？」

男子生徒の質問を聞き、

「姫路って入学最初のテストで学年二位だろ？」

「それにいつも上位一桁以内じゃないか…あと可愛い」

周りの男子生徒達はひそひそと会話をしてしまう。

「そ、その…試験の最中高熱を出してしまいまして…。それとさっきは保健室に行っていたので遅くなってしまって…」

姫路さんは少し反省するかのような理由を呟く。

そう、姫路さんは試験の時に途中退席してしまったので試験の得点は全て０点扱いになってしまったのだ。

『あぁなるほど俺も熱（の問題）が出たせいでＦクラスに…』

『あぁ化学だろ？アレは難しかった』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いてそれどころじゃなくてな…』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、風香ちゃんと奏ちゃんが寝かせてくれなくてさぁ』

風香「貴方と一緒に居た覚えはありませんよ」

奏「私も貴方と一緒に居た覚えはありませんね」

『今年一番の大嘘をありがとう』

（これは想像以上にバカだらけだ…）

僕は唖然する。

閑話休題

「でッでは一年間よろしくお願いします！」

姫路さんは再度お辞儀しながら挨拶する。

「姫路さんやっぱり可愛いなぁ…」

メズール「（ふーん。明久はあの手のタイプが好きなのね）」

ガメル「（でも危険なオーラーを感じる）」

カザリ「（奇遇だね。僕も感じるんだ）」

ウヴァ「（ああ。あの手のタイプは染まりやすいからな）」

アンク「（ま、俺達が注意すれば安全だろ。明久は俺達がいなければ困るからな）」

グリード達「そうだ（ね／よ）」

姫路さんの自己紹介が終えると僕は和んでいる状態になっていた。

でもなぜかアンク達が不気味な笑いをしていたのが気になるんだけど。

「きッ緊張しました～…」

（近！？これは話しかけるチャンス！！ここからドラマは始まり、やがて僕らは結ばれるそうこの一言は僕の幸せな未来への第一歩！）

風香「アキ兄？」

奏「何かくだらないことを考えてるのは間違いないわね」

僕が考え事をしてるといつの間にか自己紹介を終えている風香と奏が何か話していたような気がする。

でもまあいいかさて……。

「あの、姫「姫路」」

雄二に先手を取られた。

（酷い！！せっかく僕の人生計画『クラスメイトから結婚まで～君と出逢えた春～』全６５４話が開始２分でエンドロールに！）

再び閑話休題

「はっはい！何ですか？えーっと」

「坂本だ。坂本雄二」

「姫路です」

雄二は姫路さんに軽く自己紹介する。

そして姫路さんも返答する。

風香「瑞希ちゃん、久しぶり」

奏「瑞希。久しぶり」

「風香ちゃんに奏ちゃん!?　何故、ここに?」

「熱を出して、試験受けられなかったの」

「私も同じ」

「それは、残念でしたね」

「いえいえ、アキ兄と一緒だから良いんですよ」

「まあ、明久を一人にするのもなんだしね」

「相変わらずですね、風香ちゃんに奏でちゃんは」

「そんなことないですよ」

「ところで姫路。もう体調は大丈夫なのか?」

「あっそれ僕も気になる!」

雄二が質問していたところを僕も気になって参加した。

「よ…吉井君！？」

（あれ？僕何かダメだった？）

姫路さんが僕に対し驚く。一体何がいけなかったんだろう？

「明久がブサイクですまん」

（え？フォローのつもり？全然嬉しくないよ？）

雄二がフォロー（？）をするような一言を言ってくれた。

「そ、そんな！目もパッチリしてて顔のラインも細くて綺麗だし…。そのむしろ…」

だけど姫路さんも必死で弁解してくれた。

「まぁ悪くはないか…そういや明久に興味がある奴がいた気がするな」

「え？それは誰――――」

「そッそれって誰ですかっ！？」

雄二の一言で姫路さんは激しく聞きつける。

「確か…久保――――」

（久保さん？どの久保さんだろう）

「――――利光だったかな」
雄二が最後の言葉を告げる。
久保利光（性別／オス）
「……」
「おい明久、さめざめと泣くな」
（もう僕お婿に行けない…）
「アキ兄、坂本君は半分冗談で言ったんだよ」
「ああ、だから安心しろ」
「え？　残りの半分は！？」
「はいはいそこの人達静かに――――」
先生が軽く注意をしようと教壇を叩いたが…、
ガラガラガラ……（教壇が崩れていく音）
崩壊してしまった。
「え～……替えをを用意してきます」
そしてそのまま教室を後にした。

「あはは……」

その光景を見た姫路さんは軽く笑う。

（こんな教室で姫路さんはちゃんと勉強できるのかな…やっぱり体調不良で早退でいきなりFクラスなんて酷過ぎる）

僕は隣にいる姫路さんの事を心配してしまう。

「よかったぁ、風香や奏意外に女子がいて。席特に決まってないから適当に座っていいって」

島田さんはほかにも女子が入ってきた事に関してうれしい仕草を取り、姫路さんに適当に座っていいと促す。

「はい、ありがとうございます」

姫路さんは軽くお礼を言う。

奏「それより美波。聞きたい事が在るんだけど？」

風香「うんうん。私たちじゃ不満なのかな？」

美波「えっ！？え～とあはっ」

風香＆奏「「笑顔でなかったことに出来ると？」」

その事を聞いた島田さんはその場から逃げて行った。

風香＆奏「「待ちなさい！！」」

追いかける風花と奏。

（ホント仲がいいな）

「それじゃあ、そこ開いてますか？」

「うん、どうぞ」

姫路さんは僕の隣の席を選んだ。

「そっか、姫路さんもFクラスなんだ…」

僕は再び不安な表情を浮かべる。

「よろしくお願いしますね吉井く、ケホッ」

姫路さんは僕に挨拶するが咳してしまう。

「まだ体調良くないの？」

僕が諭す。

「ええ、少し…」

「隙間風の入る教室、薄っぺらい座布団、カビとホコリの舞う古びた畳、病み上がりにはいい環境じゃないよな」

姫路さんの右隣の席にいる雄二が呟く。

（これじゃいけない。やはりあれしかない）

カザリ「（説得なら僕に任せてよ）」

（良いのカザリ？）

カザリ「（セルメダル集めになるのならかまわないよ）」

（じゃあ雄二の説得お願い）

カザリ「（任せてよ）」

カザリの協力も得れたしさて僕に出来る事をするよ。

「……雄二。ちょっといい？」

欠伸をしている雄二に声をかける。

「ん？　何だ？」

「ここじゃ話し難いから、廊下で」

「別に構わんが」

僕たちは一緒に廊下に出る。

「んで、話って？」

この時カザリが僕の体を利用して現れた。

その結果僕の髪が銀髪になった。

カザリ視点

明久ｉｎカザリ「単刀直入言うよ。Ａクラスに『試召戦争』をやってみない」

「戦争だと？」

「うん。しかもＡクラス相手にだよ」

「……何が目的だ」

坂本が目を細めてくる。

「そんなのあまりに酷い設備だからに決まってるじゃないか」

「嘘をつくな。全く勉強に興味がないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなのありえないだろうが」

やれやれ疑り深いな。まあ僕も同じだけどね。

「確かに勉強用の設備は興味はないよ」

「じゃあ何のためだ？」

「Ａクラスの設備に興味があるからだよ」

「あん？」

「聞こえなかったのかい？もう一度言うよ。Ａクラスの設備に興味があるからだよ」

「明久。お前はただそれだけの為に俺に戦争を仕掛けろというのか！」

おや？どうして怒ってんだい？

「何故怒るんだい？君はだって本当は仕掛ける気満々なんだろう？」

「お前！本当に明久か？少なくとも俺の知っている明久はそんな下らない理由で仕掛けたりはしない！」

坂本はなぜか断言した。

（やれやれどうしてそう美化出来るのやら）

「僕は明久だよ。それに君は確か『世の中、学力が全てじゃない』を証明するために仕掛けるじゃないの元神童さん？」

「！お前何で知っている？」

坂本は僕（カザリ）を不審な顔で見ていた。

「……まあいい。今のお前は信用できないがいつもの明久なら信用できるからな」

「はいはい。それで」

「ふん。お前に言われるまでもない。俺自身、Ａクラス相手に試召戦争をやろうと思っていたところ　だ」

「へぇ～何でだい？」

「ふん。お前に教える気はない」

「ふ～ん。なるほど。『世の中、学力が全てじゃない』の証明は方便で本当は―――」

「っ！てめぇ！！」

雄二が僕に殴りかかったが僕は簡単にかわしていた。

「動きがおろそかだよ。雄二？」

「きやすく呼ぶな！！」

「そんな大声で言っていいのかい？」

「ちっ」

「まあ黙っててあげるよ。明久にもね」

ホントからかいやすいね。この時代は面白い。

「ふん。まあいい。Ａクラスに勝つ作戦も思いついたし……おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「そうだね」

さて先生が戻ってきたから戻りますかね。

カザリ視点終了

あのあと僕とカザリが入れ替わってから教室にも戻っていった。

先生が戻って来て自己紹介が再開されて須川君の番になった。

「えー、須川亮です。　趣味は――」

須川君の紹介が終わり、そして、雄二の番になった。

「坂本君、キミが自己紹介の最後の一人ですよ」

「了解」

雄二は先生に呼ばれて席を立つと、ゆっくりと教壇に歩み寄っていった。

その姿だけを見るとクラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように思えた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも、好きなように呼んでくれ……さて、皆に一つ聞きたい」

間の取り方が上手いとメズールが言っていた。

確かに全員の意識がすぐに雄二に向けられからね。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

雄二は一呼吸おいて、静かに告げた。

「――不満はないか？」

『『『『大ありじゃあっ！！』』』』

二年F組生徒の魂の叫び。

メズール「（かび臭い教室。古く汚れた座布団。薄汚れた卓袱台。確かにこれは不満にもなるわね）」

「だろう？　俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！　改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？　あまりに差が大きすぎる！』

『僕は、風香ちゃんや奏様がいればどこでも良い』

アンク「（おお、すごい反応だ。堰を切ったかのように次々と不満の声があふれている。これならセルメダルがかなりたまるな）」

ウヴァ「（一人につきメダル１００枚単位は硬いな）」

明久「（ところで風香や奏にラブコール送ったの誰？）」

カザリ「（何だい？嫉妬かい？）」

明久「（早く逃げるように言いたい）」

メズール「（……なんで？）」

明久「（きっとこの後始末されるから）」

グリード達「（納得）」

「みんなの意見はもっともだ。そこで」

「これは代表としての提案だが、Ｆクラスは Ａクラスに『試験召喚戦争』をしかけようと思う」

雄二はこれから戦友となるクラスメイト達に野性味満点の八重歯を見せ、戦争の引き金を引き金を引いた。

第二話（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第三話　試召戦争準備

Ａクラスへの戦線布告。

それはＦクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えない。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたらなにもいらない』

『風香ちゃんをナデナデしたい』

『奏様もっと罵ってください』

メズール「（……後半は関係ないわね。むしろ気分が悪くなるわね）」

ウヴァ「（……これでじゃ質の悪いセルメダルしか手には入んな）」

カザリ「（人間って変わってるねぇ）」

アンク「（ああ。全くだ。こんなものが欲になるってんだからな）」

グリード達「（８００年もたつと変わるもんだな）」

そんな悲鳴が教室のいたるところから上がる。

確かに誰が見ても、ＡクラスとＦクラスの戦力差は明らかだった。
それと姫路さん達にラブコール送った奴顔を覚えたからね。
それにしても……アンク達年寄りくさいよ。
さて、アンク達の事は置いといてそれより説明しなくちゃね。
ここ文月学園に点数の上限が無いテストが採用されてから４年間が経過した。
このテストには１時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。
その為、テストの点数は上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことが出来る。
また、科学とオカルトと偶然によって完成された＜試験召還システム＞というものがある。
これはテストの点数に応じた強さを持つ＜召喚獣＞を呼び出して戦うことのできるシステムで、
教師の立会いの下で行使が可能になる。
学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。
その中心にあるのが、召還獣を用いたクラス単位の戦争――――試召戦争と呼ばれる戦いだ。
その戦争で一番重要になるのはテストの点数なんだが、ＡクラスとＦクラスの点数は文字どうり桁違いだ。
正面からやりあったとしたら、Ａクラス一人相手にＦクラスは３人でも勝てるかどうか。
いや、相手次第では４，５人でも勝てないかもしれない。
雄二「そんなことは無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。

」

しかし、そんな中で雄二は自信満々に宣言してみせた。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけがないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

しかし、まだ否定的な声しか上がらなかった。

確かにどう考えても勝てる相手ではないだろうね。しかし、雄二にはその考えがあるみたいだ。

僕はそれに賭けるしかないだ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つことの出来る要素がそろっている」

この雄二の言葉をうけてFクラスの皆が騒ぎ始める。

「それを今から説明してやる」

得意の不適な笑みで説明を始める。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

???「……!!（ブンブン）」

姫路「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太と呼ばれた男子生徒。

姫路さんはスカートの裾を押さえて遠ざかると、アイツは顔に付いた畳のあとを隠しながら壇上へ歩き出した。

「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性識者（ムッツリーニ）」

土屋「……！！（ブンブン）」

ムッツリーニ。この名前は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑をもって挙げられる。

『ムッツリーニだと……？』

『馬鹿な、奴がそうだというのか……？』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ。ムッツリに恥じない姿だ……』

メズール「（……あそこまで行くと逆に清々しいわね（呆））」

ウヴァ「（自らの欲望に忠実だからな）」

カザリ「（でもあれじゃ僕は認められないな。グリード失格だよ）」

アンク「（何で己の欲望を否定するんだ。認めてしまえは楽だろうに）」

ガメル「（ＺＺＺＺ）」

アンク達が何か言ってるけど。それよりも……。

たとえどんな状況でも、自分の下心は隠し続ける。異名は伊達じゃない。

「姫路や響や風香のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

奏「やれやれ。面倒ね。でもやるからには勝つわよ」

風香「頑張ります」

「ああ、うちの主戦力だ。期待している」

大体姫路さんひとりでＦクラス生徒の４，５人分の戦力になるから。

そこに風香や奏を加えるとＦクラス生徒１４、１５人分の戦力となる。

『そうだ。俺達には姫路さんや響さんや風香ちゃんがいるんだった』

『彼女たちならＡクラスにも引けをとらない』

『ああ、彼女たちさえいれば何もいらないな』

『風香ちゃんをはあはあしたい』

『奏様激しく罵ってください』

誰だ？さっきから姫路さん達にラブコールしてる奴は？

特に奏の場合容赦ないよ。

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。学力ではあまり名をきかないけど、他の事だったら有名だ。

演劇部のポープだったりだとか、双子の姉がいたり。

『おお……！』

『ああ。あいつ確か木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じで体調不良だったのか』

『実力はＡクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

クラスの士気が上がってる。これならいけそうだよ。

カザリ「（だと良いけど）」

何で？

アンク「（あの赤毛。何か企んでる顔だからだ）」

僕はアンクの言う通りに雄二の顔を見ると意地の悪い不細工な顔にしか見えないだけど。

ウヴァ「（だからだ）」

？？？

メズール「（すぐにわかるわよ）」

僕はメズールの言葉に頷き雄二の言葉を聞いた。

……確かに企んでいたよ。畜生！

第三話　試召戦争準備（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第四話　宣戦布告（前書き）

今回は少しグロイかもしれません。

第四話　宣戦布告

『おいおい、俺達ならやれるんじゃないか！？』

『なんだかやれそうなきがしてきたな！』

こんなにすごいメンバーが揃っていれば打倒Ａクラスも夢じゃなくなってきた。

今クラスの士気は確実に上がっていた。……なのに。

雄二「それに、吉井明久だっている」

……シーン――――

そして一気に下がった。

メズール「（これでわかったでしょう坊や）」

ウヴァ「（全くそこまでして弄りたいかね）」

アンク「（面白いかも知れんが生ぬるいな）」

カザリ「（そうだね。弄るなら徹底的にやらないとね～）」

そして君達も敵なんだね。……ってそんな事をしてる場合じゃなかった。

明久「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まった

くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことあるか？』

『さぁ？初めて聞いたが。このクラスにいるのか？』

『う～ん。……確か風香さんの双子の兄だね』

『で、その吉井明久は何が出来るんだ』

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを――――――って何で僕を睨むの？　士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

メズール「（へえ～。明久を睨むってことは私達の敵ってことね）」

ウヴァ「（まあ、待てメズール。どうせなら奴にセルメダルを入れてからでも遅くねえ）」

メズール「（確かにそうね。でも私たちに喧嘩を売った事はどうするの？ウヴァ）」

ウヴァ「（この国にこの言葉ががある。売られたケンカは倍にして返すと）」

アンク「（……意味が違うと思うがな）」

カザリ「（でもまあ～。彼の欲望でセルメダルが増えれば僕達は得だよ～）」

ガメル「（誰がセルメダルを入れるの？）」

ウヴァ「（俺が行こう）」

アンク「（へまするなよ）」

ウヴァ「（それくらい分かってる！）」

こっちはこっちで何かするつもりみたいだし。

でも雄二に不幸があるなら良いかな。

よし任せよう。

「そうか。皆はこいつのことを知らないのか。ならば教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ！！」

言っちゃった。

ウヴァ「（俺に代われ！）」

え？うんわかった。

その瞬間僕とウヴァが入れ替わった。

その結果髪の色はそのままで髪型がオールバックに変化した。

ウヴァｉｎ明久視点

『……それって、バカの代名詞――（シュッ）うわっ！？』

さて、油断してる隙にさっき明久がＡクラスを見て生産したセルメダルを入れるしよう。

……誰かが何かしたような気がするが気にするまい。

良質の欲望で合ってくれよ坂本雄二。

俺（ウヴァｉｎ明久）は雄二に向ってセルメダルを投げた。

「そうだ。バカの代め――（シュッ）うおっ！？」

ウヴァｉｎ明久「ちっ」

外したか。運の良い奴だ。

「あ、明久！！……何をする！！」

ウヴァｉｎ明久「あん？　何のことだ？　俺には何の事だかわからんな」

雄二が俺を睨んでくるが俺には何とも思わんがな。

姫路「あの、それってどういうものなのですか？」

ふん。知らない奴がいたのか。驚きだな。

「まぁ、具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」

明久や他の生徒の記憶によると本来の召喚獣はものに触ることができない。

召喚獣が触れられることが出来るのは他の召喚獣だけである。

しかし、明久の召喚獣は違う。

雄二の言ったとおりに物に触ることとことの出来る特別製だ。

「そうなんですか？それって凄いですね。召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことが出来るなら便利ですよね」

ウヴァｉｎ明久「あん。そんな大したもんじゃねぇ」

姫路「（ビクッ）そ、そうですか」

島田「ちょ、ちょっとそんな言い方しなくてもいいんじゃない吉井！」

『『『そうだそうだ！！！姫路さんに謝れ！！』』』

うっせな！相変わらず島田はうるさいな。それに他の連中が騒いでるな。少し黙らせるか。

ウヴァｉｎ明久「なんか言ったか！！あん？」

ドン！！（畳を叩く音）

バキ！！畳とその下にある木材が割れる音。

島田「！」

『『『『いえ何でもありません』』』』

静かになったか。

ふん。まあ実際に大したもんじゃない。

召喚獣の負担は何割かは明久に帰ってくる。

だから、明久の召喚獣が傷ついたら、明久もダメージを負う。

だがダメージを受けるのは明久だけじゃない。

そのことによって俺達もダメージを受けるわけだ。

つまり精神がリンクするってことだけだから表面的にではなく、内面にくるってことだ。

『つまり。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できない奴が一人いるってことになるよな』

「気にするな。どうせいてもいなくてもお――（シュッ）いや、それでも役に立つ要素はある」

……さっきの攻撃は風香だったか。くくっ雄二の奴顔が青いぞ！何かを投げられる瞬間でも見たのか？

「どうした雄二顔が青いぞ」

「う、うるせぇ！！と、とにかくだ。俺達の力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思う」

やはり人前では俺の名は呼べないようだな。風香にしろと奏にしろ。手を強く握って我慢するしかないわな。

くくっ言いざまだな。

「皆、この待遇は大いに不満だろう？」

『『『当然だ！』』』

「ならば、総員武器をとれ！出陣の準備だ！」

『『『おおーーっ！！』』』

姫路&風香&奏「「「お、お――……」」」

ほう。クラスの雰囲気に押されたのか。可愛いとこもあるじゃねえか。

「俺らに必要なのは卓袱台ではない！俺らに必要なのは…」

『『『Ａクラスのシステムデスクだ！』』』

「明久にはＤクラスへの使者になってもらおうと思う。無事大役を果たせ！」

俺を利用しようと言うのか。面白いならばこちらも利用させてもらおう。

ウヴァｉｎ明久「確か下位勢力の宣戦布告の使者って大抵酷い目に遭うじゃなかったか？」

さてどう出る。

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加えることは無い。騙されたと思って行ってみろ」

ウヴァｉｎ明久「本当か？」

「本当だ、俺を誰だと思っている」

ウヴァｉｎ明久「性格が悪く人の不幸が好きな男だ。違ったか？」

「……なるほど。俺に喧嘩売ってんだな明久！！」

雄二が俺（ウヴァｉｎ明久）が殴りかかったが俺は軽く避けた。

ウヴァｉｎ明久「どうした？雄二お前の力はその程度か？」

「舐めるなよ！！」

俺（ウヴァｉｎ明久）は雄二の拳を受け止めそのまま放り投げた。

ガッシャン！！（雄二が卓袱台に当たり卓袱台を巻き沿いにしてふっとんだ音）

雄二「ぐっ（ガク）」

ふん。やはりまだ完全ではないな。メダルはそろっているが何故か本来の力がでない。

まあいい悩んだことでわからないなら時が来ればわかるだろう。

そんなことより。

俺はさっき雄二に投げたセルメダルを回収して倒れている雄二の向って言った。

ウヴァｉｎ明久「その欲望、使わせてもらう」

『『『え…？』』』

風香「だ、ダメアキ兄！」

奏「くっ所詮あんた達は！」

ふん。あの二人は周りの連中で動けないようだな。

今がチャンスだ。

突然、雄二の後頭部に『投入口』が現れる。
俺（ウヴァｉｎ明久）はその『投入口』にさっき回収した『セルメダル』を入れる。
すると…
雄二「あ、あぁ、あぁぁぁ…！？」
ズル、ズ、ズルルル…
雄二の背中から、『ミイラ』のような化け物が出てきた。
『『『『な、なんだ！？』』』』
姫路&島田「「キャアァァァァァァァッ」」
風香&奏「「何てことを！！」」
ウヴァｉｎ明久「騒ぐな！」
『ひっ！』
ウヴァの声にＦクラスの連中は黙る。
ウヴァｉｎ明久「こいつは『ヤミー』。そこの気絶している坂本雄二の欲望から生まれた」
『『『さ、坂本の？』』』

ウヴァｉｎ明久「そうだ」

聞いてきたので俺（ウヴァｉｎ明久）は答えた。

そして、ヤミーは畳を食べ始めた。

風香「……何で畳を食べてるの？」

ウヴァｉｎ明久「……おそらくクラス交換という欲望が今の雄二の欲望なんだろうな」

『『『……』』』』

次に卓袱台を食べ始めた。もはや何も言うまい。

ヤミー「うぐ、あぁぁ！」

突然喰うのを止めると、カマキリを擬人化したような化け物…『カマキリヤミー』になった。

ウヴァｉｎ明久「さて代表殿指示通り宣戦布告に行くか。行くぞカマキリヤミー」

カマキリヤミー「御意」

俺達は教室を出てＤクラスに向かった。

Ｄクラス前

さて、どう面白くしてやろうかな。そうだな。

ウヴァｉｎ明久「カマキリヤミー」

カマキリヤミー「はっ」

ウヴァｉｎ明久「お前はこのクラスに入りＦクラスの使者として宣戦布告してこいそうだな時間は午後一時だ」

カマキリヤミー「お任せくださいウヴァ様」

ガラッ（扉が開く音）

ふふ。さてどうなる。

？？？『誰だい君は？それにそんないかれたキグルミなんて着てどうしたんだい？』

教室の中で失笑が聞こえるな。ふん。所詮何年たっても人間は変わらんな。いや欲望だけは増えたか。

カマキリヤミー『我らが王ウヴァ様からの言葉だ。ありがたく聞くがいい』

？？？『な、何様だお前は！！』

カマキリヤミー「……黙って聞く事も出来ないのか。愚かな人間どもよ」

？？？『『『『やっちまえ！！』』』』

ふん。愚かな連中だ。

バキッ（何かが壊れる音）

???『ぎゃあああ！！腕がああああ』

???『『『ヒイイイ！！！血が止まらない！！』』』

カマキリヤミ―『まだ続けるか？』

???『『『『……（ブンブン）』』』』

カマキリヤミ―『……最初から素直になれば怪我せず済んだがな』

???『それで話とは？』

カマキリヤミ―『誰だお前は？』

平賀『失礼。申し遅れたよ。Dクラス代表平賀源二だ』

カマキリヤミ―『そうか改めて用件を言おう。我らFクラスがこのクラスに宣戦布告をする』

平賀『……断ったらどうなる』

カマキリヤミ―『それくらい予想が付くだろ』

平賀『……そうだね。分かった。その勝負受けよう。時間は？』

カマキリヤミー『今日の午後一時だ』

平賀『……わかった。そうだ。戻る前に君に事付けを頼みたい。君の王に伝えといてよ。僕らに勝負を挑んだ事を後悔しろとね』

カマキリヤミー『良いだろう伝えておこう』

ふん。生意気言うじゃないか。面白いつぶしてやるよ。いや待てよ。あいつの欲望を利用するのも面白いか。

そろそろカマキリヤミーが戻ってくるか。さてお手並み拝見させてもらうぞ。

カマキリヤミー「ただい戻りました。ウヴァ様」

ウヴァｉｎ明久「御苦労。戻るぞ。連中のとの戦争が楽しみだ」

カマキリヤミー「はい」

俺達は用事が済んだんでＦクラスに戻った。

第四話　宣戦布告（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第五話　明久の謎（前書き）

モモタロス達が取り付いた時には以下の表記がつきます。

モモタロス…M雄二

ウラタロス…U雄二

キンタロス…K雄二

リュウタロス…R雄二

第五話　明久の謎

奏視点

ウヴァがヤミーを連れて出て行った。その瞬間誰もが気が抜けた。

いえ私と風香はこれからどうするか対策を考えなくてはいけない。

間違いなくグリード達は明久を利用してるわ。

やはりグリードは危険。このままじゃこの世界も明久も破滅してしまう。

何とかしないと……。

雄二「う、うううう」

あ、坂本、目が覚めたのね。キョロキョロしてるどうしたのかしら？。

雄二「おい明久は何処行った？」

島田「……宣戦布告にDクラスに行ったわ」

雄二「……そうか。それにしても俺が倒れた後何が起きたんだ？」

秀吉「それがじゃのう。明久がお主にメダルを入れた途端お主の体から化物が出てきたんじゃ」

「化物？」

ムッツリーニ「……化物の名はヤミ―」

またこれで明久の周りから友達が消えるのね。グリード！！どれだけ明久から大切な物を奪うの！

アンタ達は明久をどれだけ苦しめれば気が済むの。

「そうか。あの明久もどきが居ないのならチャンスだな」

えっ！？何をするつもりなの？

島田「よ、吉井もどきってどういうことよ坂本？」

姫路「そうですよ！坂本君？」

島田までも坂本に声をかける。

秀吉「どういうことじゃ？確かにわしらが知ってる明久では無かったが演技してるようには見えなかったのじゃ」

ムッツリーニ「……確かにあれは別人」

雄二「当然だ。俺達が知ってるのはバカだ。そしてお人よしだ。そんな奴が急に変わるわけがねぇ」

……その通りよ。明久はグリードに乗っ取られてるんだから。

秀吉「……確かにそうじゃのう」

姫路「私もそう思います」

木下君、姫路さん。

島田「……そうね。なんか変なもので食べてたのかしら」

雄二「そう言う事だ。すまないが何か知ってるんじゃないか風香に響」

風香「……確かに知ってます。ですが対処法はありません」

ムッツリーニ「……どうして？」

奏「私達もどうにかしようしたけど結果は悪化の一歩なの」

坂本は私達に聞いてきました。きっと情報を知りたいんだと思う。

でも教えられない。巻き込むわけにはいかないから。

雄二「ちっ、隠さなければいけないことかよ！。そんなんだから悪化するんじゃないのか！」

ムッツリーニ「……（コクコク）」

美波「ウチもそう思うわ」

秀吉「少なくともあれはワシらが知っている明久ではないのじゃ」

瑞希「わ、私もそう思います」

皆。でも……ダメなの。

???「おいおい。そんな事をすればあの男が死ぬぞ」

?どこから聞こえるの?

私はいえ私達は声がする方向に向いた。

そこには、白黒で上半身・下半身が逆転した、砂時計を彷彿とさせる姿をした何かが四体いた。

???4「あれ?僕達の話を聞く気になったの?うん。もちろんそうだよね♪」

???2「うんうん。素直が一番だよね」

???3「そうやね。その方が俺達もやりやすい」

???「聞きたい事があるのなら俺達に聞きな!ただし条件がある」

雄二「なんだ。その条件は?」

???達「「「「お前の望みを言え。どんな望みも叶えてやる。お前が払う代償はたった一つ…」」」」

奏「イマジン!どうしてここにいるの!」

イマジン「久しぶりだな!ハナクソ女!」

イマジン４「どうしてって？そんなの分かってるくせに？」

イマジン３「ウソはあかん奏」

イマジン２「そうそう。本来ならデンライナーから降りちゃいけないのにね」

雄二「そうか。詳しく教えてもらうぞ！明久の秘密を……な（ニヤリ）」

秀吉「そうじゃのう」

美波「そうね」

瑞希「教えてください」

ムッツリーニ「……（コクコク）」

坂本君達はイマジンに話しを聞くようね。

……もうしらないわよ。散々な目に在ってもね。

覚悟してね。

イマジン達「「「「契約成立（ニヤリ）」」」」

そして、イマジン達は突然発光し坂本君の中に入って行った。

雄二？「ひさしぶりの体だ！これで制限なくここに居れるな」

雄二？2「そうそう。あの電車の中は退屈だよね」

雄二？3「これやで、目的も達成できる」

雄二？4「そうそう。単純でよかったよ♪」

美波「さ、坂本何一人芝居をしてるのよ」

秀吉「むう。明久の時と同じで人が変わっておるのう」

瑞希「そうですね。それに髪の色も変わってますよ」

ムッツリーニ「……人が変わってる」

やはり、髪の色や髪形も変わってるわね。

風香「これが憑依ですか？奏ちゃん」

奏「そうよ。坂本はイマジンと契約して体を奪われたのよ」

美波「な、何ですって！どうして教えてくれなかったのよ！」

瑞希「そうです。そんなに私たちが信じられないんですか！」

奏「聞かれなかったから」

秀吉「確かにそうじゃのう。じゃがこれでは話が聞けんのう」

ムッツリーニ「……やはり、吉井妹や響から聞くしかない」

奏「イマジンについては教えてあげるわ」

私はイマジンに関して隠す必要がないため教えた。

最初にイマジンは　契約者探しをする。

それが彼らイマジンは未来から現代に来て最初にすることよ。

実体を持たないため発光する精神体で飛び回り、契約者として選んだ人間に憑依する。

次に望みを聞く。

憑依後は契約者の思い描く童話などから自身の姿形を作り、その者の望みを聞き出す。

その時に最初に私たちが見た姿になるの。つまり、最初から坂本君はイマジンに憑かれていたのよ。

そして、望みを受け入れることにより初めて実体化するわ。

そして、　契約内容の実行。

契約者の望みを叶える為に行動するの。

契約者の意思に関わらず殺人・略奪・破壊行為も辞さないわ。

契約者に憑依することもでき、その時は若干その人物の容姿が変わる。

今の坂本君の状態が憑依された状態なの。

憑依時は常人離れした身体能力を発揮するが、肉体的負担は契約者にかかるわ。

最後に契約完了。

契約者が過去をイメージすることでその身体が開いて生じた「過去の扉」から、彼らが最も強く思う過去へ飛ぶ。

望みを叶えるという行為はこの過去の時間を強くイメージさせるための間接的手段に過ぎないの（契約内容がその契約者の過去の出来事に関連している）ので、イマジンは彼らの願いを強引に解釈して契約を完了する場合もあるわ。

秀吉達「……（唖然）」

美波「……ウチらやばい事に首を突っ込みかかったわけね」

瑞希「……はい。何で、響さんが教えてくれないか分かりました」

秀吉「……その上実際に見ると背筋が凍るのう」

ムッツリーニ「……危険なところに近づかない方が安心」

雄二「な、納得できるか！俺との契約は完了してないぞ！！」

あら、体の自由を、取り戻したのね。

雄二？２「え？。でも僕達の事は知ったでしょう。これで問題ない

よね」

雄二「詐欺だ！俺が知りたいのはまあ確かにイマジンの事は知りたかったがそれよりも明久もどきの事が知りたいんだ」

K雄二「俺の名はキンタロス。よろしゅう」

黒髪に黄色のメッシュが入った長髪を後ろに束ねた髪と黄色の瞳を持ち、いつの間にか服装も和服になっている坂本君。

違うわね。今はキンタロスね。

R雄二「僕の事を聞いてるの？でも教えない♪。うそうそ♪僕の名はリュウタロス」

黒髪で顔の左半分を覆う紫色のメッシュが入ったウェーブのかかった髪と紫色の瞳を持ち、紫の染みがついた茶色のキャップを被り首にヘッドホンをかけている坂本君。
それに歩き方は常にＤＪ風スタイルでステップを踏みながら軽やかに闊歩するような陽気なものに変化しているわ。違うわね。今はリュウタロスね。

U雄二「次は僕の番だね。僕の名前は、ウラタロス」

次に髪が黒くなり青いメッシュの入った七三分けの髪と青い瞳を持ち、眼鏡をかけている坂本君。

違うわね。今はウラタロスね。

M雄二「ああん？そう言えば名前を名乗ってなかったな。俺の名は

モモタロス」

いつの間にかも木刀を持っている坂本君。違うわね。今はモモタロスね。

秀吉「ふう。明久といい雄二も大変じゃのう。これは、明久以上に大変なことりなりそうじゃのう」

奏「間違いなくなるわね。一応言っとくけど明久君の問題以外は手は貸さないわよ」

そして、釘もさしとかないとね。

第六話　イマジン対ヤミー（前書き）

今回から電王が登場しますのでセリフは分かりやすく

ソードフォーム…M電王

ロッドフォーム…U電王

アックスフォーム…K電王

ガンフォーム…R電王

と表記します。

第六話　イマジン対ヤミー

奏視点

秀吉「それはないと思うのじゃが！」

美波「そうよ。何とかしないさいよ！」

奏「無理」

瑞希「即答ですか？！」

風香「ごめんなさい。私も無理です。それに普通の女高生に対処できる問題ではないと思います」

瑞希＆美波「「た、確かにそうね（そうですね）」」

うん、うん。皆自分に正直ね。他の連中もどこかに行ってるしここは関わらない一択よね。

ガラッ（扉が開く音）

カマキリヤミー「ウヴァ様。そろそろ、食事の時間です。屋上に行かれてどうでしょうか？」

明久ｉｎウヴァ「ああ。そうだな」

ここで、現れる。空気を読まないバカが帰って来たわ。

雄二「明久！！キサマのせいで大変なことになったぞ！！お前の秘密を話して死ね！！」

……話が支離滅裂になってるわよ坂本君。

明久ｉｎウヴァ「ああん。死ぬのはお前だ！！やれ！カマキリヤミ―」

カマキリヤミ―「御意」

ヤミ―はウヴァの指示に従い坂本に攻撃をするために近づいているわ。

M雄二「ああん。面白くなってきたな！！」

と言ってM雄二は何処からかベルトを出しベルトを装備しパスを取り出すと

M雄二「変・身！　」

スッ！

パスをベルトにかざしベルトの右側にある赤いスイッチを押した。

『ＳＷＯＲＤＦＯＲＭ』

ジャジャジャンッ！

音声が流れると坂本君の体は変化した。

桃のレリーフが顔のレールを伝わって眼前に収まり、中央から割れた状態で固定され、葉の部分はチークガードのように移動していた。

そして、坂本君は仮面ライダー電王ソードフォームへと変身した。

M電王「俺参上！！」

坂本君いいえM電王は右親指を立てて、自身を指し歌舞伎のようなポーズを取る。

カマキリヤミー「……お前バカだろう？」

……うん。こっちの方も空気読まないわね。

明久「ゆ、雄二の奴」

あっ、元に戻ったのね明久君。

明久「な、なんて……」

うん、言いたいことはわかるよ。

姫路さん達もどういう顔をすればいいのか困ってるしね。

明久「なんてかっこいい恰好をしてるんだ！！！チクショウ！！！」

姫路達「「「「「「「「はい――――――――――っ！？！？！？」」」」」」」」

ムッツリーニ「……明久の価値観は理解できない」

秀吉「……むう。本当にときどきお主の事はわからなくなってくるのじゃ」

美波「ウチには吉井の考える事が理解出来ないわ！！」

ダッ！！（どこかに移動する音）

姫路「そ、そんなそれが吉井君の価値観ですか？」

ヨロッ（倒れかけている）

風香&奏「うん。さすがアキ兄（明久君）私たちも予想もしない行動を取ることに驚いたよ」

私や風香はどう反応をすればいいか悩んでしまいました。

カマキリヤミ―「あ、明久殿！！突然何を言ってるのですか？気を強く持ってください！！！」

うわぁ、ヤミ―にも心配されるわね。

M電王「話は終わったか？じゃあ戦おうぜ！！俺は最初からクライマックスだぜー！」

カマキリヤミ―「まだ話は終わってない！！」

M電王「オラオラッ！」

ブンッブンッ！！

M電王は左腰にセットしてあった物を取り出し組み立てて剣の形にしてカマキリヤミーに振り回す。

カマキリヤミー「ちっ！なんて危ない奴なんだ！？　」

しかし自慢の鎌で攻撃を避けるカマキリヤミーだった。

スッ！

カマキリヤミーは電王から距離をとると……。

カマキリヤミー「これでも喰らえっ！　」

ビュンッ（何かが飛び出す音）

両手から鎌の形したエネルギーを複数放った。

M電王「うおっ！？　」

ズバババッ！！

M電王は避けきれずに命中してしまった。

カマキリヤミー「殺ったか？　」

カマキリヤミーが見てみると煙の中から現れたのは…

M電王「俺があんな攻撃でくたばるかよ！　」

M電王はピンピンしていた。

カマキリヤミー「バカなっ！？何であれを喰らって立ち上がれるんだ！」

カマキリヤミーが驚いていると……。

M電王「こんな攻撃は喰らいなれてるんだよ！」

……自慢できることではないわね。

秀吉「……自慢できることでもないと思うのじゃ」

ムッツリーニ「……（コクコク）」

M電王「こんな奴相手に時間をかけるわけにはいかねぇ！一気に勝負を決めるぜ！」

そしてパスを取り出して……。

スッ！

ベルトにかざすと

『フルチャージ』

バチバチッ！

デンガッシャーが赤く光出すと……。

M電王「俺の必殺技ｐａｒｔ１」

そしてM電王はカマキリヤミ―に突っ込んでいった。

カマキリヤミ―「来るな！来るな！」

ババッ！！

カマキリヤミ―はM電王はを近づけさせないために攻撃を仕掛けるが……。

M電王は「そんな攻撃が効くかよ！」

ドカカカッ！！

M電王は構わず複数の斬撃の中を突き進んでいった。

カマキリヤミ―「ま、まずい！？」

カマキリヤミ―は明久君連れ慌てて逃げようとするが……。

M電王「逃がすかよ虫野郎！！」

M電王は逃がさなかった。

そして

ズバッ！

M電王はカマキリヤミ―を切り裂いた。

カマキリヤミー「バカなっ！？　」

ドッカーン！！。

そしてヤミーは爆発していった。

それにともない、足元に複数のセルメダルが落ちて散らばっていった。

M電王「俺、最強！　」

そして、お決まりのポーズを取っていた。

さて、私も仕事をしますかね。

赤い缶を取り出しブルタブを開けると鷹の形をしたメカに変わり散らばっているメダルの回収を指示を出した。

奏視点終了

明久の体の中

ウヴァ「（……バカのようだが実力はあるな）」

メズール「（そうね。注意したほうがよさそうね）」

カザリ「（やれやれ。やっかいごとは山ほどあるね）」

アンク「（ちっ、だが俺たちの計画の邪魔させないからな）」

ウヴァ「（そうだな。しかしあれが明久の好みとは恐れ入った）」

メズール「（確かに……あれは、予想外ね）」

カザリ「（でも。それは、僕たちが本来の姿に戻れば解決するよ）」

アンク「（そうだな。……ってあの女！セルメダルを回収してやがる）」

ウヴァ＆カザリ＆メズール「「「な、なんですと！！」」」

俺（アンク）はたまらず明久の体を乗っ取った。

アンクｉｎ明久「何しやがるてめぇ！！」

奏「お仕事」

アンクｉｎ明久「俺の邪魔をするのが仕事か！！殺すぞ！！」

奏「……貴方にはいえ貴方達には出来ないわ」

アンクｉｎ明久「はん。テメェを殺したとこで明久に黙っておけば問題ないからな！！」

奏「私の能力をわすれたの？アンク（クス）」

アンクｉｎ明久「ちっ」

俺は何も言わずここから離れた。

屋上

俺はむしゃくしゃした為何かないかと屋上から下を眺めると……。

きのこ頭の男が呟いていた。

きのこ頭の男「もっと力が欲しい。俺の野望の為に……」

ほう。これは面白そうだな。こいつでメダルを稼ぐか。

アンクｉｎ明久「その欲望、解放しろ」

俺は、男の後頭部にセルメダルを投げた。

面白くなってきたぜ。

第七話　キノコ頭と暗躍と新たなるグリード（前書き）

更新遅くなりました。

なかなかＤクラス戦に行きませんが次回くらいに行けると思います。

第七話　キノコ頭と暗躍と新たなるグリード

???視点

・・・・・・

チャリン（何かが入る音）

???「？」

俺が学園の支配を考えてるときに上から何かが落ちて来たような気がした。

???「まあ良――っう、うあ、あぁ、あぁぁぁ…！？」

ズル、ズ、ズルルル…

突然俺の腹部から、『ミイラ』のような化け物が出てきた。

???「ウウウ」

「な、何だお前は！？」

突然現れた化け物を見た俺は情けないが腰が抜けてしまった。

???「おい、あそこで腰抜かしてるやつがいるぞ」

???2「あん？おい、あそこにいるのは根本じゃねえか」

？？？「だよな。おまけに丸腰だぜ（ニヤニヤ）」

？？？2「そうだな。あいつには正直気に入らなかったしな（ニヤニヤ）」

恐怖で動けなくなった俺に追い打ちをかけるように後ろの方から不良達（バカ）の声が聞こえてきた。

……どうやら声の様子からたまたまここを通りかかったってところか。

それにしても、最悪だな。

前の方には化物が後ろの方からは不良達（バカ）がいる。

万事休すか。

「くっ」

おそらく来るだろうと思われる攻撃に耐えるために身を丸めたその時……信じられないことが起きた。

不良「な、何だお前！？」

不良2「やる気か！」

「ウウウウ！！！」

あろうことかあの化け物は不良達（バカ）に戦いを挑み簡単に倒してしまった。

不良達「「ギャアーーーッ！！」」

不良「ば、化物だ！」

不良2「な、何でこんなのがいるんだ！？」

怯える不良(バカ)達。

ミイラのような化け物は何事もなかったようにケロッとしていた。

「ウウウウ」

ガシッ（化け物が不良の腕をつかんだ音）

シュルシュル（何かを巻きつける音）

不良達「「ぎゃあああ――――！！う、腕が！」」

「う、腕が黒く染まった」

あまりに突然の事に俺は、動けなかった。

だってそうだろう。

突然化け物が現れたんだぞ！。

話の続きだが俺を襲うはずだった不良(バカ)達を化物はあいつらを軽くひねった。

その上不良達の腕に包帯みたいな物が巻きつけられ黒く染まっていた。

まるで、まるで石みたいになっていた。

黒く染まった不良達の腕から青い色の鳥の羽毛が六枚現れた。

「ウウウアアアア」

「な、何だ！何をする気だ！（ガタガタ）」

ガシッ（化け物が俺の腕をつかんだ音）

「ウウウ、ち、力だ」

プスッ（青い羽毛を俺の腕に刺した音）

「っ、な、何するんだ！」

化け物はいや奴は俺の腕を掴み倒した不良どもから何らかの力で手に入れた青い羽毛を俺の両腕に三枚づつ刺した。

「この野郎！」

奴のわけの分からん行動に頭に来た俺は奴に殴りかかった時奴に変化が起きた。

「うぐ、あぁぁ！」

奴から赤い炎みたいな物をまき散らしながら何かが起きていた。

え？良く分からないって？簡単言うのなら鳥の卵から再生されるような感じだ。

それから数分いや数秒かもしれない。

とにかく奴に変化が終わったらしくまき散らしていた物が消えると……。

俺は信じられない物を見た。いやそれは間違いだ。

何故なら俺が自己紹介をしていた時の話だ。

突然クラスメイトの奴がキングは俺だと言いだし、

俺以外のクラスメイトにいつの間にかミイラみたいな化物が奴の周りに現れ。

いや奴は確か屑ヤミ―と言っていたな。

だが俺がクラスで見た奴より違うな。

確か包帯の巻かれている面積が狭く、顔の中心に黒丸があるなどの差異があった。

いや今はそれは良い。その屑ヤミ―が他のクラスメイトに取りつきやがった。

それと同時に奴に従い始めた。無論先生も奴に従い始めた。

クラスメイトを達を従えた奴は俺をクラスから追い出した。
逃げるしかなかった俺は校舎裏に隠れるしかなかった。
インコヤミー（青）「おい、なにトリップしている。お前の望みは力か？」
「？」
俺は過去に振り替えていると突然声を掛けられたので振り返ると、
さっき変化した化け物いや今はインコが擬人化した化け物がいた。
「もう一度聞く。お前の欲望は力か？」
「……お前が叶えてくれるのか？」
奴の突然の質問に驚いたが、もしかすると奴に対する何かを得る力を手に入るかもしれない。
そんな気持ちになった。
「質問を返すな！はいかいいえで答えろ」
「そうだ。あの化け物を倒す力とそして、この学園を支配する力と知恵が欲しい！」
「ふん。いいだろう。その願いを叶えてやろう。但し今言った欲望失くすなよ。
そうすればお前は力が無くなる」

欲望を無くすなだと。ふん当然だ。今の欲望だって序の口だ。
もっともっと上を目指すからな。
???視点終了
・・・・・・・・・・
アンクｉｎ明久「ほう。驚いたな。ここまで成長を早めるとはあのキノコ頭の欲望。不純だが面白い」
俺は、屋上から白ヤミーから鳥系ヤミーに成長するまでの過程を見ていた。
メズール「（ホント不純ね）」
ウヴァ「（だが、これほど早く成長をするのも奴の欲望が強いからだ）」
カザリ「（そうだね。さてこれからどうするんだい？）」
アンクｉｎ明久「あん？」
メズール「（決まってるんじゃない。そろそろＤクラスとの戦いよ♪）」
ウヴァ「（この戦いを利用すればセルメダルを沢山手に入れられるからな）」

カザリ「（そうだね。でも残念ながらメダルの質は保証できないけどね。
それにあの子にメダルを取られるわけにもいかないしね）」
アンクｉｎ明久「そうだな。だがこれだけの人間がいるんだ。
いくらあいつでもすべてのメダルの回収は出来ない」
そうとも前回は失敗したが今回は失敗はしない。
さてとくだらない欲望で出来た不純すぎるセルメダルを使うとするか。
風香と奏、邪魔出来るものならしてみろ。
メズール「（フフッ））」
ウヴァ「（お手並み拝見だな）」
カザリ「（気をつけてよ。あの変なのがいるよアンク）」
アンクｉｎ明久「安心しろカザリ。これから面白くなるぜ」
そのころ別の場所で
？？？「ヤミーの気配だ」
しもべ１「いかがします？」

???「……放っておけ。それよりも例の女にセルメダルを投入したか」

しもべ2「問題ありません。午後からあります試験召喚戦争でお見せできるかと思います」

???「クククッ楽しみだな。この俺を楽しませてくれよ」

男は立ち上がると同時に怪物へと変化した。

怪物の姿はバイザー状の眼、頭はサソリの兜、体はカニの殻のような鎧、

両腕にはカニのようにでかいハサミがついている。

……足はエビの模様がついている。

サソリ、カニ、エビを一つに合わせた怪物「お前ら俺は誰だ？」

しもべ達「「「我らが偉大な王ノブナガ様」」」

ノブナガと言うの名の怪物はいったいなにものだろう？

第七話　キノコ頭と暗躍と新たなるグリード（後書き）

次回のバカとメダル（欲望）とグリードは……。

Dクラス1「あ、あの化け物はいないぞ」

Dクラス2「そうか。よし今のうちにFクラスを倒すぞ」

メズールin明久「あら可愛い娘。ねえそれをするつもりならもっと面白くすることが出来るわよ」

島田「いや――――っ！！！」

？？？「お、お姉さま～」

M電王「これは一体どういう事だ？明久！」

アンクin明久「ちっ…。他の連中も目覚めていたか」

第八話　試験召喚戦争と集まるグリード

ご意見ご感想をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0691t/

バカとメダル（欲望）とグリード

2011年10月26日02時01分発行